



LAZONA ラゾーナ 藤尾歴史散歩

藤尾学区まちづくり協議会 歴史文化部会



第21回 旗振山(相場山)

江戸時代には北国・東国の諸大名の領地から、年貢米をはじめ大量の物資が琵琶湖水運によって大津町（おおつまち）に集められていました。湖岸には島の関や紺屋関など13の舟入があり、浜通りと呼ばれている一帯には幕府の御蔵をはじめ加賀蔵・彦根蔵など19の蔵屋敷がありました。



● 地面に紹介されている大津米会所跡プレート

現在の滋賀銀行本店から少し中央大通りに行ったところの石畳には、大津米会所跡のプレートが置かれています。当時は、この場所に大津御用米会所が設けられてコメの相場がたち、盛んに取引が行われていました。

米市場としては大坂が発展しましたので、大津の米会所も大坂の相場をいち早く知ることが必要になり、飛脚による伝達も行われましたが、徳川10代将軍家治の安永4年(1775年)頃から、旗色の信号で米価を知らせることが始められました。



● 大津米会所跡石畳

大坂の米相場をいち早く大津の米会所へ



相場山で京都からの信号を受け、大津市内に伝達する



大坂の米穀取引所の櫓の上から京都方面に向けて旗振りを行う

● 「藤尾の歴史」より

小関越えの峠の喜一堂地藏尊の右側南面の山道を登っていくと関西電力の送電鉄塔に出会いますが、そこから更に上りつめていくと標高324.7mの逢坂山の頂上で、国土地理院の三等三角点が設置されています。(JR東海道線の逢坂山トンネルの真上の逢坂山の頂上です。この頂上に立つと琵琶湖が浜大津から遠く長浜方面まで展望が開け、目を転じると山科盆地一帯が見通せます。)

大阪堂島で発せられたコメの相場は、当時は各地へ旗振り信号で伝達される方法がとられており、大津へは伏見稻荷山の東にある二石山を経て、藤尾のこの地点から大津米会会所に情報が伝えられていました。その所以から、地域ではこの山が『旗振山(相場山)』と呼ばれるようになっていました。この頂上で、大旗は畳一畳、小畑は半畳の白旗(天候によって黒旗)を振って相場を伝えました。大阪堂島から京都伏見まで4分、大津まで5分で伝えられたと言われています。

(文・松井佐彦)

バックナンバーご希望はコミュニティセンターまで

